

県内で確認10体劣化進む

日米関係が悪化した昭和初期、米国の宣教師から友好の証しとして日本全国の小学校などに贈られた「青い目の人形」。現在、県内で確認されている10体は各校の校長室などに置かれ、教育活動に使われる一方で、人形の劣化も進む。人形が来日して2027年で100年。関係者は「戦争遺物として保存、継承する方法を考えるべき時だ」と訴える。

(浅井正智)

17日午後、幸田町幸田小学。グレースの目の周りにはかびの校長室から運送業者が青い目の人形「グレース・エッサ」を運び出していった。京都の文化財修復業者でレプリカを制作するための。

「子どもたちが気軽に抱いたり、触ったりできるように人形を後世に残そうとするなら、修繕やレプリカ制作が必要となる。ただ、人形につ

進んでいる。川谷市の愛知教育大では23日まで、県内の青い目の人形が展示されているが、程度が差こそあれ、それぞれ劣化が進んでいる。

規定がなく、費用を誰が負担するかが問題になる。グレースのレプリカ制作が住民の募金で賄われたように、西尾市吉良中学校の「アテナ」はクラウドファンディングでの制作を目指しており、地域住民に依存しているのが実情だ。

こうした現状を踏まえ、成田さんは「自治体が人形を文化財に指定すれば、安定的に保存できるのでは」と提案する。修繕やレプリカ制作に公費を入れるほか、劣化する人形本体を博物館のような公共施設に移すことで、学校や地域の負担軽減が期待できる。「エセル・デーン」を持つ

修繕やレプリカ制作募金に依存

青い目の人形 継承ピンチ



レプリカ制作のため、しばらく学校からいなくなる「グレース・エッサ」を見つめる児童たち。幸田町大草の幸田小で

青い目の人形 米国人宣教師が1927年、日本各地の小学校などに贈った西洋人形の通称。約1万2千体のうち、約340体が現存する。県内の10体は、名古屋市の個人所有1体を除けば、全て三河地方の小中学校に保管されている。

一方で「マーシャル・セントラル」がある田原市田原中部小学校の彦坂登一朗校長は「人形が学校にあるからこそ戦争の恐ろしさを児童に伝える大切な教材になる」と強調。校内保存を重視する声も少なくない。保存の具体案は異なっても「人形を後世に伝えたい」という点では一致している。成田さんは「100周年に向けて、10体そろって保存していくための議論を盛り上げていく」と述べた。